

関東支部第3回研究会

関東支部第3回研究会(2011年度第2回)が2011年5月26日(土)東洋大学第2白山キャンパスにて開催された。参加者は約50名であった。

関東支部第3回研究会のプログラム

テーマ： 「 先端的分野のインターンシップ

グローバル化に対応する接続効果と実践上の課題 」

日時：2012年5月26日(土) 11:00開始・受付10:30

会場：東洋大学白山台第2キャンパス B206

主催：日本インターンシップ学会関東支部、共済：日本インターンシップ推進協議会

支部長挨拶：11:00~11:10 学会副会長・関東支部長 太田和男

研究発表

1. 11:10~11:40 (司会 佐藤勝彦)

「日本におけるグローバル型インターンシップ経験」

元プレーメン経済工科大学生 Andreas Seidler 氏

<休憩> 11:40~12:40 (60分)

関東支部総会：12:40~13:30 (50分)

基調講演

13:30~14:20 (司会：道畑美希)

「PBL型インターンシップのキャリア形成効果」

東京大学大学院 岡田 文雄氏

研究発表

2. 14:20~14:50 (司会：奥田美都子)

「工学分野におけるインターンシップとキャリア選択」

日本大学生産工学部 小田部 明氏

3. 14:50~15:20 (司会 奥田美都子)

「聖徳大学における長期インターンシップの接続効果」

日本インターンシップ推進協会・事務局長 斉藤良雄氏

<休憩20分>

4. 15:40~16:10 (司会：島田 薫)

「CA人材育成におけるインターンシップの役割 - 桜美林大学の事例から」

桜美林大学 塩谷さやか氏

5. 16:10~16:40 (司会：島田 薫)

「欧米における観光インターンシップの接続効果」

帝京平成大学太田和男氏、文教大学那須幸雄氏、文京学院大学千葉隆一氏

「総括」16:40~17:00 (司会；古閑博美)

立教女学院短期大学 薬師丸 正二郎氏

<休憩> 17:00~17:20

情報交換会 17:20~19:00 東洋大学白山第2キャンパス「カパティーナ」

< 総括 (抄録) >

1) Andreass (アンドレアス) Seidler 氏から「日本におけるグローバル型インターンシップ経験」というテーマで、ドイツのインターンシップが紹介された。会場の出席者から、アンドレアス氏の経験、ドイツの大学生の就職意識と日本の学生の就職意識の違い、とくに目標設定能力、手法について質問がなされた。回答として、「大学への入学年齢、および徴兵制での精神面肉体面での鍛錬という日本とは異なる社会背景がキャリア形成意識に反映している」と指摘された。ドイツの企業は、日本と異なり、OJT 制度がなく、学生にも即戦力としての力が求められていること、大学に入る前の段階で職業観が醸成されていることが日本との大きな違いあるとの指摘もなされた。

今後の課題として、企業の人材育成のシステムが学生のキャリア形成に及ぼす影響、さらには、企業の採用後の人材育成との関係をも踏まえたインターンシップの在り方、大学ではなく、高校生活段階でのキャリア教育との関連性を考える重要性が開陳された。

2) 岡田文雄氏から、化学システム工学分野における「PBL 型インターンシップのキャリア形成効果」というテーマで基調講演を頂戴した。ここでは、理系・文系を問わず適用でき、さらに今すぐにでもできる効果的インターンシップのあり方、言い換えれば「メールを通じてでも、学生とのマンツーマンの指導を行うことがプログラムの学生の満足度・成果を高めている」と説明されたことは極めて印象的であった。この方法はプログラムに係る担当教員の人的資質に負うことが多いとは言え、面倒な会議や稟議を経ることなく、実施できる魔法の調味料のように考えられた。

今後の課題としては、「実習企業への就職は是か非か」という点が残されているとの指摘がなされたが、今後、関東支部でも議論を深めていきたい。

3) 小田部 (おたべ) 明氏から、「工学分野におけるインターンシップとキャリア選択」というテーマでの研究発表があった。日本大学における2 年次、3 年次の2 年間にわたる5 つのステップを経て、きめ細やかな配慮を行ったインターンシップシステムが実施されている事例が紹介された。

具体的な企業と学生とのきめ細やかなサポートこそが、インターンシップの成果を生み出す要因であることの説明を受けた。まさに、「大教室でのマスプロ授業ではなく、双方向でのマンツーマンの対応がポイント」という重要性が感じられた。なお、離職率について、工学系学生とサービス業、情報通信関係との相関関係が紹介されたが、「学科の専攻と就職先の選択に際し、第一志望であったのか」、「インターンシップを行ったうえで決定したにもかかわらずミスマッチが起きたのか」など興味深い指摘がなされた。

4) 斉藤良雄氏の研究発表、「聖徳大学における長期インターンシップの接続効果」では、一般的に「お客様」扱いとして過ごすといわれる2 週間のインターンシップに比べ、6 か月に及ぶインターンシップの実施について説明がなされた。今後の長期インターンシップ実施に向けての貴重なデータ提供であり、6 か月という長期のインターンシップを実現するには、大学のカリキュラムをどのようなものにするかという課題も提起された。一方、受入れ先 (企業) の獲得が大きなテーマであることが判明し、6 か月に及ぶ長期インターンシップのメリットは、今後の研究により実証されよう。そのメリットを企業が認識し、積極的に活用することになれば、これまで以上に、学生、企業、大学など関係者が満足できるプログラムとなるとの確信が得られた。

5) 塩谷 (しおたに) さやか氏からは、「CA 人材育成におけるインターンシップの役割 - 桜美林大学の事例から」という興味深い研究発表がなされた。ここでは、依然として女性に人気のあるキャビンアテンダント (CA) の業務が紹介され、CA 人材育成のコンセプトとして LCC との参入、競争が激化する航空業界における「考える

CAの育成の必要性」が指摘された。また、敢えて、経営政策学部に作り、経営的な論理的思考のできる学生を育成し、2年次のサバイバル力を身につけることを主眼とすることの意義が開陳され、興味深く、印象的であった。

- 6) 太田和男、那須幸雄、千葉隆一各氏による合同研究「欧米における観光インターンシップの接続効果」が発表された。実際にアメリカ、イギリス、ドイツに足を運び、大学の担当者からヒアリングを行う形態での調査研究である。諸般の事情から実現しにくい観光業における長期インターンシップについて、日本と異なる点が二つの視点からの指摘がなされた。第1は、観光インターンシップという専門職型インターンシップについて、日本でも企業側もメリットを認めるのは長期インターンシップであるとされながら、その期間の点において、日本が2週間程度のものであるのに対して、米国が3ヶ月、ドイツが3~6ヶ月、英国が1~3ヶ月という長期で多く実践されている点である。第2は、米国、ドイツ、英国の観光インターンシップは就職を前提としており、その観光インターンシップ先への就職率は、米国で31~50%、ドイツでは、インターンシップ参加者の三分の二が企業の採用に応募し、その50%が合格しているという点は、今後、わが国でも検討しなければならない事項である。こうした日本と英米独のいずれの類型が、学生にとって良いかは、今後の研究を待ちたいが、極めて重要な課題である。(薬師丸正二郎)